

洗 礼

B・ノヴァク神父（神言会司祭）

キリスト教は、「洗礼」という言葉をユダヤ教から、そのまま借りていますし、教会の秘跡としての洗礼式とユダヤ教の一つの儀式として洗礼者ヨハネが授けた洗礼式とは、表面的に似ていますので、両方とも同じものであると思っている人が大勢いるようです。キリスト教の洗礼式の意味を理解するために、まず、この二つの洗礼式の違いをはっきりと意識する必要があります。

新約聖書の言語であるギリシャ語では、「洗礼」のことを「バプティスマ」と言います。また、「洗礼を授ける」ことは「バプティゾー」と言います。それは、元来「浸す」、また、「沈める」、「洗う」という意味です。この言葉どおりに、洗礼者ヨハネは、自分のもとに來た人々をヨルダン川の中に浸したのです。それは、ユダヤ教の中で行われた様々な宗教的な清めの儀式の一つでした。この儀式にあずかった人は、自分の罪を清めていただきたい、回心して、正しい生活をしたいというような自分の決心を表していました。しかし、イエスが杯や皿の清めについて教えたこと（マタ 23,25-28）を、人間の清めに当てはめることができます。つまり、このような儀式によって外側、つまり人間の体が洗われても、内側、つまり人間の心は、そのままでした。人間の心に変化が起こるかどうかということは、清めの式にあずかることによって表した自分の決心を実行するかどうか、ということにかかっていたのです。

秘跡としての洗礼は、洗礼者ヨハネの悔い改めの洗礼とまったく異なります。まず、秘跡は、イエス・キリストご自身の働きですので、この秘跡を受ける人は、この秘跡が表す恩恵を必ず与えられますし、この人の心の本質的な変化が起こるのです。この違いを表すために、洗礼者ヨハネは、次のように語りました。「わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から來る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」（マタ 3,11）

キリスト教の洗礼を理解するために、洗礼式の典礼を見るのが、一番良い方法ではないかと思えます。洗礼式は、受洗者の悪霊の拒否と信仰宣言から始まります。それによって、受洗者は、罪や他の悪から完全に離れたいという意志、また、イエス・キリストに従うことによって、自分に信仰を与えてくださった神の呼びかけに応えたいという望みを表明すると同時に、この望みを実行するように全力を尽くして努めることを約束するのです。その後、洗礼を授ける人は、受洗者の頭に3度水を注ぎながら、または、受洗者を水の中に3度浸しながら、次の言葉を唱えます。「○○○○（受洗者の名前）さん、わたしは父と子と聖霊のみ名によって、あなたに洗礼を授けます。」聖書において「名」は、本質を表すものです。三位一体の神

の本質（愛、命）に、人を「浸す」とは、この人を神ご自身にささげることです。したがって、この言葉をもって洗礼を授ける人は、受洗者を三位一体の神に奉獻するわけです。神は、イエス・キリストがご自分の死と復活によって成し遂げてくださった救いの恵みをすべての人々に与えたい、つまり、すべての人々をご自分との愛の交わりに受け入れたいと望んでおられるからこそ、洗礼によってご自分にささげられた人を必ず受け入れるのです。誰かが水に浸されたからとか、この人の頭の上に水が注がれたからではなく、神ご自身に受け入れられたからこそ、神ご自身の愛と命に満たされたからこそ、神との交わりを持たない状態である罪から解放され、神の子に生まれ変わり、新しい人生を始めるのです。受洗者の頭に水を注ぐことは、この人の原罪とこの人が洗礼を受けるまでに犯したすべての罪がゆるされる（清められる）ことを表しています。受洗者を「水の中に『沈めること』は、洗礼志願者がキリストの死と結ばれて埋葬され、キリストとともに復活して墓から出て、『新しく創造された者』（二コリ 5,17、ガラ 6,15)となることを意味しています。」（カトリック教会のカテキズム 1214）この変化を表すために、受洗者は、白衣を着て、新しい名（洗礼名）を付けられるのです。

洗礼式の時に、受洗者は、額に聖香油で十字架のしるしを付けられます。また、ロウソクを授与されます。これらによって、神の子として新しく生まれた人が神から特別な使命を与えられたことを表されています。というのは、旧約時代に神は、誰かを選び特別な使命、特に祭司や王になる使命を与えたときに、この人のところに預言者を遣わし、この人の頭に油を注がせたことによって、御自分の望みを表し、この人を任命し、必要な力を与えました。司祭が受洗者の額に聖香油で十字架のしるしをすることに、同じ意味があります。この際に司祭は、次の言葉を述べます。「わたしたちの主イエス・キリストの父、全能の神は、あなたを罪から解放し、水と聖霊によって新しいいのちを与えてくださいました。神の民に加えられたあなた（がた）は、神ご自身から救いの香油を注がれて大祭司、預言者、王であるキリストに結ばれ、その使命に生きるものとなります。」要するに、受洗した人は、イエス・キリストの使命にあずかり、司祭職、預言職、また、王職にもあずかるようになるのです。司祭職とは、人間と神との間を仲介すること、つまり、人のために神に祈ることなのです。預言職は、神からいただいた言葉、つまり福音を宣べ伝えることです。神の言葉を宣べ伝えるにあたって大事なものは、福音について話すことよりも、神の言葉に忠実に生きることなのです。王職とは、仕えられることではなく、仕えること、つまり愛を实践することなのです。

代父母が、復活されたキリストの象徴となっている復活のロウソクから火をともしたロウソクを受洗者に渡す意味を司祭が次の言葉をもって説明します。「あなた（がた）は、キリストの光をもたらす者となりました。主イエス・キリストが来られる時、すべての聖人とともに喜んで主を迎えることができるよう、いつも光の子として歩みなさい。」このように、教会が

様々な象徴と言葉によって、私たちが洗礼を受けるのは、自分の（死後の）救いのためだけではなく、キリストと結ばれて生き、教会の使命にあずかり、神の国を証し、福音を宣べ伝えるためであるということ教えるわけです。

このような使命は、各々キリスト者の個人的な使命ではなく、教会全体の使命なのです。私たちは、洗礼を受けることによって、生まれ変わって（ヨハ3,5-8）、「罪に対して死んで」「キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生き」（ロマ6,3-13）るようになりますが、同時に、「一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。」（1コリ12,13）、要するに、洗礼を受けた人は、神の民である教会に加わり、イエス・キリストの体である教会の一員となるということなのです。キリスト者にとって、この事実を常に意識して、教会の生活に積極的に参加し、他のキリスト者とのかわりを保つことが大事なことになります。教会、もっと具体的に言えば小教区の共同体は、イエス・キリストご自身から与えられたキリスト者の自然な生活の場になっているわけです。キリスト者が肯定的に共同体の生活に参加するときだけ、教会は、キリストから与えられた使命を果たすことができますし、一人ひとりのキリスト者も、生かされ、強められて、自分の日常的な場において自分自身の個人的な使命を果たすことができるのです。

教会は、次の言葉をもって洗礼の意義を短くまとめます。「聖なる洗礼はキリスト者の生活全体の基礎、霊的生活の扉、他の諸秘跡に導く入り口です。洗礼によってわたしたちは、キリストの肢体となり、教会の一員となって、その使命に参加する者となります。『洗礼は水とことばによる再生の秘跡です』」。（カトリック教会のカテキズム 1213）

洗礼を受けない人の救いの可能性

洗礼を受けることによって、人間はキリストが成し遂げられた救いの恵みを受けて、神と和解し、神の命にあずかるようになる意味で救われるならば、洗礼を受けない人は、どうなるのでしょうか。洗礼を受けずに死んだ人は、救われるのでしょうか。それとも、救われることなく、永遠に神から、また、救われた人々から離れることになるのでしょうか。自分の先祖をはじめ、現在に生きている親類や洗礼を受けていない他の人について多くのキリスト者は、このような心配を抱いているようです。けれども、それは、現在の問題だけではなく、初代教会のキリスト者、また、2000年の間の数えきれないほど多くのキリスト者の問題でもあったのです。

洗礼と救いの関係を理解するために、まず、イエスご自身の言葉を見る必要があると思います。「それから、イエスは言われた。「全世界に行って、

すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。」(マコ 16,15-16) 確かに、イエスは、洗礼を受ける人に救いを約束されましたが、洗礼を受けない人は、救われないということを言われませんでした。イエスが言われたのは、「洗礼を受けない者は滅びの宣告を受ける」のではなく、「信じない者は滅びの宣告を受ける」ということでした。要するに、決定的なのは、洗礼を受けることではなく、信じることなのです。聖書において、と同時に、イエス・キリストにとって信じるとは、神の存在を認めることではなく、神との正しい関係に生きること、最終的に愛に生きることなのです。聖ヨハネは、次のように書き記しました。「愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。」(1ヨハ4,7) 聖ヨハネが教えたとおりに、愛に生きる人は、それをはっきりと意識しなくても、神の命にあずかっているし、神を知っている、つまり、神と繋がっているのです。逆に、「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない。」(1ヨハ4,20) ということがあります。というのは、キリストを知ることによって、神のことを「好きになって」、場合によって洗礼まで受けて、表面的にキリスト者として生き、キリスト者らしく話しても、与えられた恵みを無駄にして、心の中で神から離れてしまうことが可能です。言い換えれば洗礼を受けても、イエスが語られた「信じない者」になる恐れがあるということなのです。「信じない者」になったキリスト者の神との実際の関係は、隣人に対する態度の中で表されているのです。私たちが洗礼を受けるのは、自分の死後の救いを確保するためではなく、キリストと結ばれて生き、教会の使命にあずかり、神の国を証し、福音を宣べ伝えるためなのです。このような生き方によってこそ人間は、イエスとの交わりを深めながら、決定的な救いである神との一致に向かって歩むのです。言い換えれば、洗礼を受けるだけではなく、洗礼の恵みに忠実に生きている人だけが自分の救いについて安心することができるということなのです。

カトリック教会のカテキズムの中で、「神は救いを洗礼の秘跡に結びつけられました。神ご自身は秘跡に拘束されることはありません」(1257) という言葉、さらに、「キリストとその教会とを知らずに真理を求め、自分の知るところに従って神のみ旨を行うすべての人は救われうるのです」(1260) という言葉をもってカトリック教会は、洗礼を受けずに死んだ人の救いの可能性をはっきりと認めています。けれども同時に、「教会は永遠の幸福の保証を与えるための、洗礼以外の手段を知りません。したがって教会は、洗礼を受けることのできるあらゆる人々を「水と霊によって」生まれさせるために、キリストから受けた使命をなおざりにしないように努めています。」(カトリック教会のカテキズム 1257) ということもはっきりと教えるのです。つまり、教会は洗礼を受けて、洗礼の恵みに忠実に生きている人に、イエス・キリストご自身から与えられた権威に基づいて救いを保証す

ることができますが、洗礼を受けない人の救いの可能性を認めても、それを保証することができないということなのです。従って、洗礼を受けていない人が救われるだろうという希望を持って、私たちは、誰にも、「洗礼を受けなくても必ず救われる」とか、「洗礼を受けているかどうか関係ない」などのようなことを絶対に言えないのです。

洗礼後の人の状態と課題

洗礼を受けることによって、人間は生まれ変わり、神の子として生きるようになりますが、洗礼を受けることは、決して目的に辿り着くことではなく、最終的な目的に向かって旅を始めることなのです。旅立つ人が安心感をもたらす自分の家や慣れている環境を離れ、知らない新しいところに行くように、洗礼を受けた人は、慣れてきた生き方から離れ、特にその中でイエスの教えに合わないところを変えながら、イエスから学んだ新しい生き方を実践するように努めるのです。

確かに、イエスがご自分の言葉と行いによって示してくださった生き方は、創造主である神の意志だけではなく、人間の心の望みに適う生き方ですので、それを知った人は、それに憧れて、どんな犠牲を払っても自分のものにしたいと望むようになってもお不思議ではないでしょう。この人の心の状態は、恋に落ちた人の心の状態によく似ていると思います。つまり、相手において新しく素晴らしい世界の発見と、今まで探してきた自分の心の望みに適うビジョン（未来像、望ましい未来シナリオ）に伴う喜びや希望、また、他の愉快的感情に勇気付けられて、相手を支え、守るためにどんな苦しみにも耐える自信、また、このビジョンを実現するために、どんなに大きな問題や混乱や他の妨げが生じて、それを必ず乗り越えることができるという自信を持つのです。けれども、感情はいくら大きくても、少しずつ発散して、なくなってしまうものなので、恋という感情から冷めた人は、厳しい現実、特に相手との繋がりを保ち、それを深めるために、実際に払わなければならない犠牲がはっきりと見えるようになります。その時に多くの人が、恐ろしくなり、自信を失い、相手と出会った前の生き方に戻りたいと望むようになるか、または、実際に相手から離れて、前の生き方に戻ります。洗礼を受けた人は、それと同じような問題と出会い、同じような危機に直面することがあります。

聖パウロはこのような問題を自分自身で体験して、それをローマの信徒への手紙の中で描きました。「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。」（ロマ7,14-25）つまり、聖パウロは、イエスと出会ってから、イエスに自分の人生をゆだねて、イエスに従うために洗礼を受けましたが、そのような強い望みに従い、このような決心を実行す

ることがなかなかできず、イエスと出会う前に持っていた考え方や習慣が間違っているということが分かって、それに戻ってしまうことがあったようです。聖パウロは、イエスと出会い、イエスに従う決心をした後にも残っていた、自分を中心とする古い生き方への愛着を「古い人」と呼びました。そして、イエスが示してくださった生き方、これから実際に生きようと望んでいた生き方を「新しい人」と呼びました。聖パウロとすべてのキリスト者が体験している通りに、洗礼によって新しい人に生まれても、古い人が生き続けます。つまり、洗礼を受けることによって、今までのいろいろな慣れやくせ、執着や愛着などがなくなれないということなのです。自分の中に「古い人」と「新しい人」が生きているために受洗者は、聖パウロと同じように、内面的な争い、つまり自分が慣れている古い価値観と、心から正しいものとして認めているが、まだ身に付いていない新しい価値観との間の争いを体験することがあるわけです。そのような争いのために、洗礼を受けた多くの人が、受洗してから自分の人生が難しくなった、場合によって苦しくなったと感じるのです。

そのようなことを経験した聖パウロは、キリスト者に次のような指示を与えます。「キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、真理がイエスの内にあるとおりに学んだはずです。だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっていく古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。」(エフェ4,21-24)「今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。互いこうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。」(コロ3,8-10)

聖パウロの教えに基づいて、キリスト者の生活の目標、キリスト者の霊的な「戦い」の目的とは、自己中心の生き方(古い人の支配)から自由になって、神中心にのみ生きること(新しい人の完成)であるということが言えると思います。聖パウロは、このような生き方について、次のように語ります。「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」(2コリ3・18)つまり、私たちは、「古い人」という覆いを除ければ除くほど、洗礼によってイエスの似姿として創造された「新しい人」が成長します。そして、イエスと同じように神の心に適う神の子になればなるほど、自分の生き方によって神の栄光をはっきりと現すのです。幸いに、このような成長は、人間の努力の結果ではなく、聖霊の働きの結果ですので、厳しい現実や自分の無力を知って自信を失っても、私たちは、聖霊の力に頼って開かれた心を保つならば、つまり、どんなことがあっても、イエスと共に、イエスのように生きたいという望みを保つならば、キリストが示してくださった道の目的に必ず辿り着くことができるという確信を持つことができるのです。